

まえがき

清王朝に仕えた宮廷画家の業績

清王朝は如意館（宮廷画院）を作り、康熙、雍正、乾隆の三帝の時代に宮廷絵画は最盛期に達した。その時期、イェズ会の宣教師であり、画家である郎世寧らが、西洋絵画の明暗法、透視法を伝えた。同時に、中国画の散点透視の技法も使われた。その写実的な絵画は、皇帝の好みに合い、彼らの才能や技術が認められた。特に、郎世寧は自ら絵を制作しながら、宮廷の中国人画家に西洋画法を教えた。宮廷中国人画家の焦秉貞、唐岱、金昆、張為邦、丁觀鵬などもヨーロッパ絵画の方法を取り入れ、凹凸と明暗の光と影の効果を使い、筆法はより繊細で写実的になった。その結果、宮廷において東西融合の画風が形成され、「新体絵画」と呼ばれた。その題材は山水画、花鳥画、人物画に及んでいる。

郎世寧をはじめ、その周辺の宮廷画家たちはそれぞれ個性的な絵画の高度な写実能力を持ち、造形はしつかりしており、そしてそれを認めたのは皇帝であった。彼らの絵画作品はほとんど宮廷、あるいは皇帝個人に収蔵されたので、民間にはあまり流出していなかった。彼らは東西折衷の画風を完成させることに心を砕いた。その創作は、「新体絵画」の面貌を表していたが、西洋人画家と中国人画家による「東西合璧」の合作はさらに成熟し、その筆による作品は生気があった。そして、画家たちは自らの技法に異なる絵画技術を吸収したのであった。中国人画家は西洋絵画の写実手法を取り入れ、西洋人画家は中国絵画の工筆画の表現方法を学び、東西交流の新たな局面が形成された。つまり、宮廷画家たちは中国の伝統的な筆・墨・紙・硯という「文房四宝」を使いこなした。さらに、清王朝の皇帝が彼らにとって偉大な教授であったということもプラスされる。彼らの活躍の結果、多くの作品は当時の宮廷絵画の

主流となった。その東西絵画の融合は、時代の宮廷絵画の様式として以前の宮廷絵画と違い、また、同時代の文人絵画、及び民間絵画とも違う。

本書全体の構成では、第一部分では郎世寧の芸術生涯と絵画作品を中心にしている。第二部分では郎世寧に関わる宮廷画家とその作品を紹介している。

郎世寧は中国の康熙、雍正、乾隆の三朝、五十一年もの長い歳月の間宮廷画家として仕えた。彼は一七一五年に中国に入った時に、康熙皇帝に画家の身分を認められ宮廷に残り、その後、円明園の設計に参加し、中国の伝統的な材料の膠を使い、宣紙や絹の上に絵を制作した。即ち、今日の「膠彩工筆画」の手法で、彼は新たな絵画を創り出した。その画技で清王朝の真実の歴史と宮廷の様子を記録した。その結果、数多くの歴史的名作が残された。

郎世寧の周辺にいた同時代の画家たちが果たした役割、位置を明らかにすることで、東西文化の融合と展開がわかり、さらに、中国宮廷絵画との関わりにおいて非常に重要な価値と意義が見いだせるであろう。郎世寧の周辺画家たちとそれらの作品には、画法の変容だけではなく、その内面的および時代的な美意識の変容があると認めなければならぬ。郎世寧と周辺の宮廷画家が相互に影響しあいながら多様な絵画様式を創り出したこの時期は、中国人の精神上においても、重要な意味と意義を持つ時代であったと位置づけることができる。

二〇一六年二月二日

清王朝の宮廷絵画

—— 郎世寧とその周辺の画家たち ——

目次

まえがき 清王朝に仕えた宮廷画家の業績……………

第一部 郎世寧

第一章 郎世寧の初期作品……………

一、早年のカステイリオーネ（郎世寧） 4

二、紫禁城への道 8

三、郎世寧の絵画制作 13

四、「百駿図」と「八駿図」 29

第二章 郎世寧の盛期作品……………

一、正式な「朝服像」 42

二、「心写治平図」 51

三、皇帝雪景行楽図 61

四、「乾隆皇帝大閱図」 66

五、鶴図と花鳥図 69

六、「魚藻図」 83

七、皇帝狩獵図 87

第三章 郎世寧の晩期作品

一、銅版画 106

二、「香妃像」 119

三、晩年の制作活動 126

第四章 郎世寧の作品鑑賞

一、山水画 142

二、人物画 143

三、花鳥画 150

四、動物画 154

第二部 清代の宮廷画家

第一章 宮廷の西洋人画家

一、王致誠 166

第二章 宮廷の中国人画家

二、艾啓蒙	171
三、安德義	176
四、賀清泰	180
五、潘廷章	183

一、焦秉貞	188
二、唐岱	190
三、金昆	192
四、張為邦	194
五、丁觀鵬	196

あとがき.....

参考文献.....